TOP MUSEUM

東京都写真美術館ニュース eyes110

イメージ・メイキングを分解する

見るは触れる
日本の新進作家 vol.19

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2022 Vol.110

INTERVIEW

「イメージ・メイキングを分解する」展 出品作家 タマシュ・ヴァリツキー（ハンガリー） インタビュー

タマシュ・ヴァリツキーは、既存のテクノロジーを分析・分解し、視覚体験のあり方を問う作品群で世界的に注目を集めるハンガリー出身のニューメディア・アーティスト。8月9日から開催される「イメージ・メイキングを分解する」展では、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ（2019年、ハンガリー館）に出品された最新シリーズ〈想像のカメラ〉（2016年〜）が国内初披露されるほか、初期の代表作も出品されます。そこで今回は、作家インタビューとともに出品作品をご紹介します。

作家メッセージ 「イメージ・メイキングを分解する」展参加に向けて

「私はカメラに囲まれて育ちました。子供の頃は、童話のほかに写真機屋のパンフレットや映画制作の教科書を読んでいました。そして、9歳からアニメーションを制作しています。高校時代には夜になると親友と暗室にこもり、映画のリールや印画紙を現像し、引き伸ばし機で写真を拡大していたものです。写真と映画、後にはビデオとコンピューターが私の人生とともにありました。たくさんのカメラを持っていましたが、そのうちのいくつかは日本製でした。

ですから、カメラを使い、そしてカメラを愛する人々がよく理解できます。私自身が、これらの機械たちと密接な関係があるのです。」

—— タマシュ・ヴァリツキー

視覚体験のあり方を問う最新作

〈想像のカメラ〉シリーズ　2016－2019年

19世紀に開花した視覚・光学装置をベースに、想像上の“あり得たかもしれない”映像機器をコンピューターによるグラフィックスおよびアニメーションで提示。制作にあたってヴァリツキーが試みたことの一つは、これら夢想した機械を通じて「私たちが世界をどのように見るか、人間がどのようにものを見るか」を例示することだったという。

実際とは異なるカメラや光学機器の進化を夢想してリアルに描き出していますが、主に19世紀の機械原理を基にしているのはなぜですか？

〈想像のカメラ〉シリーズで私が目指したのは、登場する機械を見た誰もが、どのように機能するかを理解できるようにすることでした。そこで、私が想像の中で発明した装置を視覚化するうえで、通常であれば隠されているものも含めて、ほとんど全ての構造が見えるようにしています。歯車と歯車がどのように接続されているか、軸やベルトによって回転がどう伝達されているか、どの要素が相互に関連しているかを目で追ってもらえれば、私がどのように想像して構築したか理解していただけると思います。しかし、これは従来の機械を基にしたから可能だったことで、もしデジタル技術の構造を採用して極小のICチップを盛り込んでも、鑑賞者には伝わらなかったでしょう。

過去のインタビューで、幼い頃からカメラに囲まれ、カメラ特有の言語とともに育ったと語っていました。また、本シリーズの中には、9歳のときに初めて制作したアニメーションのコマ画像を使用した作品もあります。この〈想像のカメラ〉は、あなたの自伝的側面も含んでいると考えて良いのでしょうか？

その通りです。例えば、《二眼レフカメラ》（表紙）は、このシリーズで唯一、既存のカメラに基づいた作品となっています。私の父は熱心なアマチュア写真家で、安いローライフレックスの模造品を持っていました。このカメラを貸してもらったとき、私は9歳の子供でした。ファインダーを覗いてみると、部分的にぼやけた反転画像が見えましたが、現実よりもはるかに興味深く感じました。それは私にとって、小さな魔法の劇場だったのです。

《二眼レフカメラ》のグラフィックでは、カメラの前方に2つのレンズが置かれており、カメラのファインダーにも映っています。しかし、このファインダー内の画像では被写体である2つのレンズの像が反転しています。鮮明なのは一部分だけで他の部分には焦点が合っておらず、四隅は暗く、画像全体が一点透視図法で撮影されています。これは、カメラがこれら2つの被写体を認識する方法です。私にとって《二眼レフカメラ》は、“現実を映した画像が、現実と同じになることは決してない”という、シリーズ全体を通したモットーを示しているのです。

《ゾートロープ・カメラ》〈想像のカメラ〉より
2017/2018年 コンピュータ・グラフィック 作家蔵

表紙図版）タマシュ・ヴァリツキー《二眼レフカメラ》〈想像のカメラ〉より 2017/2018年 コンピュータ・グラフィック 作家蔵

INTERVIEW

初期を代表するアニメーション作品

《ザ・ガーデン（21世紀におけるアマチュア映画）》1992/1996年

ヴァリツキーが独自に開発した「水滴遠近法」によって制作。映像では、作家自身の娘である幼児が自由に動き回るなか、彼女の興味に応じて空間が歪んでいく。

「水滴遠近法」を考案した意図について教えてください。

一点透視図法は、ルネッサンス時代からの西洋美術における標準的な表現技法ですが、私は80年代にコンピューターを使い始めたときから、既存の技法とは異なる遠近法をデザインできるのではないかと考えていました。

「水滴遠近法」では、視点が無数にあり（主人公がすべての方向に目を持っているかのように）、また消失点も変動するように設定しました（地平線は直線ではなく円形で、登場するオブジェは収縮し、あらゆる方向に消えていきます）。その結果、《ザ・ガーデン（21世紀におけるアマチュア映画）》で、主人公（当時2歳だった私の娘）が自ら支配する魔法の国で事物を発見するシステムが誕生したのです。ここでは、事物のサイズや歪み方は主人公の動きに呼応しており、花や木は彼女が寄りかかると大きくなり、同時により遠い事物は縮小します。

この映像世界の形は一滴の水に似ています。観客はこの“水滴”の外にいるので、彼ら見る側の視点は影響しません。この作品は、他の人の視点も私たち自身の視点と同じくらい興味深いかもしれないということを示唆しているのです。

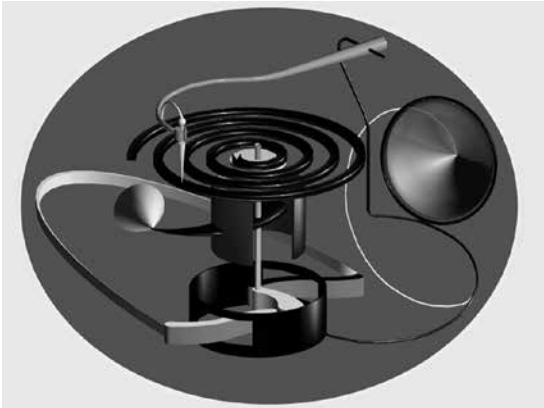
《ザ・ガーデン（21世紀におけるアマチュア映画）》
1992/1996年 シングルチャンネル・ヴィデオ 作家蔵

《ザ・ガーデン（21世紀におけるアマチュア映画）》
1992/1996年 シングルチャンネル・ヴィデオ 作家蔵

身近な機械をユーモラスに擬人化

〈機械たち〉シリーズ　1989年

作家を取り囲む機械を解体し、内部構造や動作原理をCGによって描いた作品。このシリーズの《グラモフォン》は、世界的なメディアアートの祭典、アルス・エレクトロニカで最優秀賞作品となり、ヴァリツキーは作家としての地位を確立した。



《グラモフォン》〈機械たち〉より 1989年 コンピュータ・グラフィック 作家蔵

身近な機械の構造に注目したのはなぜですか？

ターンテーブルやミシン、車はすべて、生活を一変させた独創的な発明ですが、もっとも興味を惹かれたのは、毎日使用する機械たちの動作原理について私たちはどれだけ知っているのか？ということでした。ミステリアスな機械で満ちた世界に住むのは、かなり恐ろしいことだと思うからです。

そこで、私は動作原理に基づきながら、バーチャルな機械を構築してみることにしました。例えば、グラモフォン（円盤式蓄音機）なら、どのように回転板が一定の速度で動き、振動がスピーカーに届いて音を発するのかを想像して、コンピューターの3D技術で描いたのです。また、視覚的にも面白みのあるオブジェ、仮想彫刻にしたいとも思いました。

このシリーズを作成した1989年当時、3D技術のソフトウェアは現在ほど洗練されていませんでしたが、それでもコンピューターを使ってこのような仮想のオブジェを作成できるという魔法に私は魅了されました。まるで実物のように表面や影、光の反射、透明な部分があるにもかかわらず、実際には存在していないのです。

タマシュ・ヴァリツキー

ニューメディア・アーティスト。1959年ハンガリー、ブダペスト生まれ。9歳で初めてアニメーションを創作。その後、画家、イラストレーター、写真家として活動し、1983年からコンピューターを使った制作を開始。1989年、アルス・エレクトロニカ（オーストリア）で“コンピューター界のオスカー”と称されるゴールデン・ニカ大賞を受賞。2019年の第58回ヴェネツィア・ビエンナーレにてハンガリー代表に選出された。

Photo: Jozsef Rosta

イメージ・メイキングを分解する

Reinventing Image-Making

B1F 2022.8.9|火| - 10.10|月・祝|

絵画、写真、映画、テレビ等の視覚表現や、脳内で見る夢や言葉にならない曖昧な印象、そして目に見えるものから心の中に浮かんだことまでを、イメージという語で指し示すことができます。このようなイメージに形を与えることを、本展では「イメージ・メイキング(image-making)」と呼びます。

科学的探究心と技術の発展により、光学を利用したイメージ・メイキングが飛躍的に進化したことで、人間の視覚を正確に再現するだけでなく、本来肉眼では見ることはできないイメージまで作り出すことが可能になりました。このことは、多くの芸術家たちに刺激を与え、視覚的表現の可能性を拡げた一方で、技術的なルールを課すことにもなりました。

本展では、東京都写真美術館の収蔵資料であるイメージ・メイキングのための装置や機器の展覧を通して、その一様ではない技術や原理を紹介するとともに、イメージ・メイキングの技術の仕組みや道具に注目し、分解したり要素を組み替えたりしながら、標準化されたイメージへの批評を加えて、イメージ・メイキングを新たなものとして再発明してきた作家たちの作品を紹介します。

イメージには実体があるわけではありません。イメージは、作家が制作した作品やコンピュータや映像装置から出力された場所を支持体にして、その形を変えながら広く伝わっていきます。そして、視覚を通じて外的なイメージを認識するだけでなく、想像力によって内的にイメージする私たちも、イメージの担い手なのです。

1

2

1	映像装置:多種多様なイメージングの装置
2	アート・エクス・マキナ:コンピュータによる「美」の分解
3	木本圭子:描出の身体とアルゴリズム
4	藤幡正樹:非・光学のイメージ生成
5	タマシュ・ヴァリツキー:あり得たかもしれないイメージ・メイキング

3

4

1)フリーダー・ナーケ《無題(ウォークスルー・ラスター)》〈Art Ex Machina〉より 1972年 シルクスリーン 個人蔵 ©Gilles Gheerbrant 1972/2022
2)川野洋《無題 (Red Tree)》〈Art Ex Machina〉より 1972年 シルクスリーン 個人蔵 ©Gilles Gheerbrant 1972/2022
3)木本圭子《INSIDE》2009年 シングルチャンネル・ヴィデオ 東京都写真美術館蔵
4)藤幡正樹《ルスカの部屋》2004/2022年 インスタレーション [参考図版] 東京都写真美術館蔵

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/日本経済新聞社 [助成] 公益財団法人吉野石膏美術振興財団

関連イベント

会期中に関連事業を開催する予定です。最新情報は当館ホームページをご参照ください。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ホームページでご確認ください。

野口里佳 不思議な力

Noguchi Rika:Small Miracles

2F 2022.10.7|金| - 2023.1.22|日|

写真と映像、ドローイングによって構成される本展は、写真家・野口里佳の初期作品〈潜る人〉(1996年)から最新作までを出品作品に含み、時間や場所も超えていく写真の「不思議な力」に導かれるように、作家がこれまでに出会ってきた様々な現象や光景が描き出されます。

1

2

3

4

5

野口里佳(1971年ー)

さいたま市出身。那覇市在住。展覧会を中心に写真・映像作品を発表。現代美術の国際展にも数多く参加している。2002年、第52回芸術選奨文部科学大臣新人賞(美術部門)を受賞。作品は東京国立近代美術館、国立国際美術館、グッゲンハイム美術館、ポンピドゥセンターなどに収蔵されている。

1)〈きゅうり 8月21日〉2017年 2)〈ヤシの木 #3〉2022年
3)〈海底 #1〉2017年 4)〈不思議な力 #8〉2014年
5)〈クマンバチ #1〉2019年 東京都写真美術館蔵

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

関連イベント

会期中に関連事業を開催する予定です。最新情報は当館ホームページをご参照ください。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ホームページでご確認ください。

見るは触れる　日本の新進作家 vol.19

Seeing as though touching　Contemporary Japanese Photography vol.19

3F 2022.9.2|金| – 12.11|日|

多和田有希〈I am in You〉2018年 Courtesy of rin art association

東京都写真美術館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するため、新しい創造活動の展開の場として「日本の新進作家」展を2002年より開催しています。第19回目となる本展では、写真・映像イメージの持つテクスチュア（手触り）を起点に、写されたイメージのみならず、イメージの支持体となるメディアそれ自体への考察をうながす、5名の新進作家の試みをご紹介します。

写真・映像とは本来、物質性をともない、見る者の身体と密接な関係の中で存在するメディアと言えます。しかしながら美術館という、作品から一定の距離をとり鑑賞することが求められる場においては、作品に触れ、その肌理や重量を感じることは許されません。にもかかわらず、そうした状況においても、わたしたちは、視覚のみから作品のテクスチュアを感じ取る、豊かな想像力を有することもまた確かです。さらに、コロナ禍において接触が禁止される世界においても、視覚や聴覚を最大限働かせることで、アクリル板やモニター越しに相対するモノの手触りを知覚することが可能です。

本展でご紹介する5名の作家による写真・映像作品は、視覚を通しその物質としての手触りを想起させます。さらに、わたしたちが今見ているイメージとは、どのような物質から構成されているのか、イメージの生成プロセスのみならず、写真・映像メディアの本質へと目を向けさせます。本展は、5名の作家による探求を通し、多様化し掴みどころのない写真・映像メディアの現在地を捉える機会となるでしょう。

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞　[助成] 芸術文化振興基金　[協賛] 東京都写真美術館支援会員

多和田有希

1978年生まれ、東北大学農学部応用生物化学科生命工学専攻卒業、ロンドン芸術大学キャンバーウェル・カレッジ・オブ・アーツ卒業、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻博士後期課程修了。京都芸術大学准教授。写真療法のリサーチをベースに、人間の精神的治癒のシステムをテーマに制作をしている。自らの撮影した写真表面を消す（削る、燃やすなど）という行為を通し、都市や群衆の集合的無意識や個の意識変容をイメージとして湧出させる。主な展覧会に、「第12回恵比寿映像祭 時間を想像する」（東京都写真美術館、2020年）、「写真都市展 ウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たち」（21_21 DESIGN SIGHT、2018年）、個展「悪魔祓い、系統樹、神経の森」（G/P gallery、2018年）など。

水木塁《雑草のポートレートおよび都市の地質学（dubbed version 3）》2022年

水木塁

1983年生まれ、京都市立芸術大学美術学部工芸科漆工専攻卒業。京都市立芸術大学美術研究科メディア・アート領域博士号取得。都市文化と美術史上の問題を接続することで、現代都市におけるリアリズムを基にした風景と情景の関係性をテーマに制作を行う。とりわけ近年は「自然」の定義を「人間のアクティビティーの彼岸」として捉え、様々なメディアを用いて作品を展開している。近年の展覧会に、「ON―ものと身体、接点から」（清須市はるひ美術館、2022年）、「constellation #02」（rin art association、2021年）、個展「東下り」（WAITINGROOM、2019年）、個展「鏡と穴－彫刻と写真の界面 vol.3 水木塁」（gallery αM、2017年）など。

澤田華《64のポストビューおよび目下のシーン》2021年

photo: Koichi Takemura

澤田華

1990年生まれ、京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了。物事を認識する際に生じた些細な引っ掛かりを起点として、図像と想像の相互関係を検証するプロセスを作品化し、写真・映像をはじめとした様々な表現形態を用いて展開する。主な展覧会に、「第3回PATinKyoto京都版画トリエンナーレ2022」(京都市京セラ美術館、2022年)、「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」(愛知県美術館ギャラリー、2019年)、個展「夏のオープンラボ:澤田華360° の迂回」(広島市現代美術館、2020年)など。

岩井優《経験的空模様 #1》(Control diariesより) 2020年
Photo: Shu Yamakawa ©Masaru Iwai, Courtesy of Takuro Someya Contemporary Art

岩井優

1975年生まれ、東京藝術大学美術研究科博士後期課程修了。国内外の地域にて参与的な手法で活動に取り組み、クレンジング(洗浄・浄化)を主題に、映像、インスタレーション、パフォーマンスを展開している。主な展覧会に、「ヨコハマトリエンナーレ2020 AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」(横浜美術館、2020年)、「新・今日の作家展2018 定点なき視点」(横浜市民ギャラリー、2018年)、「リボーンアート・フェスティバル2017」(宮城県石巻市街地、牡鹿半島、2017年)、個展「公開制作83 岩井優 ハウツー・クリーンアップ・ザ・ミュージアム」(府中市美術館、2021年)、個展「コントロール・ダイアリーズ」(Takuro Someya Contemporary Art、2020年)など。

永田康祐〈Function Composition〉2019年 [参考図版] Courtesy of ANOMALY

永田康祐

1990年生まれ。社会制度やメディア技術、知覚システムといった人間が物事を認識する基礎となっている要素に着目し、あるものを他のものから区別するプロセスに伴う曖昧さについてあつかった作品を制作している。主な展覧会に、個展「約束の凝集 vol.2 永田康祐|イート」(gallery αM、2020年)、「FALSE SPACES 虚現空間」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2019年)、「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」(愛知県美術館、2019年)、「オープン・スペース2018 イン・トランジション」(NTTインターコミュニケーション・センター、2018年)、「第10回恵比寿映像祭 インヴィジブル」(東京都写真美術館、2018年)など。

photo: Yuki Akaba

関連イベント

会期中に関連事業を開催する予定です。最新情報は当館ホームページをご参照ください。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

写真新世紀 30年の軌跡
写真ができること、写真でできたこと

The 30th Anniversary of the New Cosmos of Photography
What Photography Can Do; What Has Been Done by Photography

B1F 2022.10.16|日|－11.13|日|

「写真新世紀」は、1991年にスタートした公募形式によるキヤノンの文化支援プロジェクトです。2021年度をもって公募は終了しましたが、これまでに行った44回の公募から1,038組の受賞者が誕生しています。本展は、一般投票から選ばれた歴代受賞10作品をご紹介し、30年間の歩みを振り返ります。

写真新世紀展2021会場写真

[観覧料] 無料
[主催] キヤノン株式会社　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

〈お問い合わせ〉
キヤノン 写真新世紀事務局 03-5482-3904
〈公式サイト〉https://global.canon/ja/newcosmos/

写真展 星野道夫　悠久の時を旅する

Hoshino Michio: The Eternal Journey

B1F 2022.11.19|土|－2023.1.22|日|

少年のころから北の自然に憧れ、極北の台地アラスカに生きた星野道夫。20歳の時に初めて足を踏み入れたアラスカの村の記録から、亡くなる直前まで撮影していたロシアのカムチャッカ半島での写真までを一望すると同時に、貴重な資料展示を交え、旅を終えることなく急逝した星野道夫の足跡をたどります。

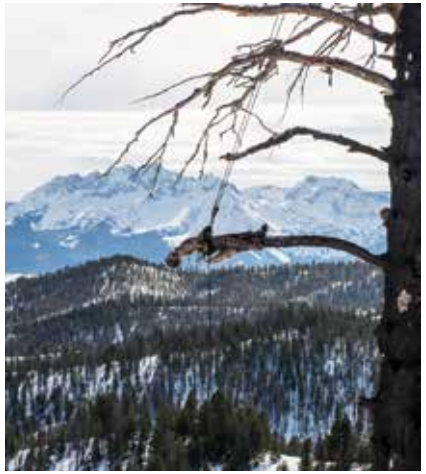
写真：星野道夫

[観覧料] 一般1,000円 ほか 各種割引あり
[主催] クレヴィス　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館　[協力] 星野道夫事務所

〈お問い合わせ〉
株式会社クレヴィス 03-6427-2806
〈公式サイト〉www.crevis.co.jp

1F マシュー・バーニー『リダウト』プラス

アメリカ人美術家、マシュー・バーニーの特集上映。銅板を彫り、水槽に浸し、電気めっき加工する制作過程をフィクションとして描いた『リダウト』(2018)を、古代ローマ神話、オオカミの神秘、サバイバリストなど、同作に通底する関連4作品とともに上映。バーニーの旧作『クレマスター』サイクル全5作(1994-2002)と『拘束のドローイング9』(2005)も並映します。



[上映期間] 2022.8.16(火)－9.4(日)
[休映日] 8.22(月)、29(月)、9.1(木)
[料金] 作品により異なる

〈お問い合わせ〉トモ・スズキ・ジャパン有限会社
TEL.090-8819-4675　mail@tomosuzuki.com

Matthew Barney, *Redoubt*, 2018. Production still. © Matthew Barney, courtesy Gladstone Gallery, New York and Brussels, and Sadie Coles HQ, London. Photo: Hugo Glendinning

1F くじらびと

©Bon Ishikawa 2021

人口1500人、ガスも水道もないインドネシア・ラマレラ村。火山岩に覆われた土地は作物が育たず、手造りの舟と銛(もり)1本でマッコウクジラに挑む太古さながらのクジラ漁が村の生活を支えています。伝統の捕鯨を400年間続けながら、自然とともに生きるラマレラ村の人々の日常を、繊細かつ臨場感あふれる映像で描き出します。『世界でいちばん美しい村』の石川梵監督最新作。

[上映期間] 2022.9.27(火)－10.14(金)
[休映日] 10.3(月)、6(木)、11(火)
[料金] 一般1,800円、学生(大学・専門)・高校生1,500円、中学生以下(3歳以上)・シニア(60歳以上)・障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)1,200円

監督：石川梵　2021年|ドキュメンタリー|日本|113分|カラー|ビスタ|5.1ch

〈お問い合わせ〉Bonfilm合同会社
TEL.042-725-2696

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
(株)資生堂
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
ゲッティイメージズジャパン(株)
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
ピクテ・ジャパン(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)アール&キャリア
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アオイネオン(株)
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
SMBC日興証券(株)
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーショナル
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
(株)NHKビジネスクリエイト
ENEOSホールディングス(株)
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三愛石油(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)サンライズ
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
(株)JTB
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校/東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
(株)西武・プリンスホテルズワールドワイド
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
(株)ダイケンビルサービス
台新國際商業銀行
大成建設(株)
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)髙島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ
(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロンマネージメント
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
日本航空電子工業(株)
(株)日本廣告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケーションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハースト婦人画報社
(株)ハーツ
パナソニック(株)
(株)パラゴン
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善雄松堂(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール
(他1社)

支援会員の
詳細は
こちら▼

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人

(令和4年7月現在・五十音順)

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。空が高くなり白い雲がたなびくこの季節、可愛らしい万華鏡レンズはいかがでしょうか。直接覗いて見る以外にも、カメラやスマートフォンのレンズにかぶせて撮影しても楽しめますので、花火など季節の風物詩を撮影するのもおすすめです。

LOOKEYE "FANTASTIC"　770円(税込)
LOOKEYE "Cat"　990円(税込)
LOOKEYE "OPTRIXX"　1,100円(税込)

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)　[TEL] 03-6447-7684
[定 休 日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE
カフェ

フロムトップ

野菜をたっぷり摂れるサラダとポタージュのセットをご用意しました。セットに添えるビスケットは甘さ控えめでお食事にも合うように作ったスコーンのようなお菓子。野菜やスープに合わせてお召し上がりください。

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-21:00 ※当面は10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730
[定 休 日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

	3F	2F	B1F	1F
2022 8	アヴァンガルド勃興 近代日本の前衛写真 (収) 5.20(金)–8.21(日)	TOPコレクション メメント・モリと写真 (収) 6.17(金)–9.25(日)	イメージ・メイキングを 分解する (収) 8.9(火)–10.10(月・祝)	マシュー・バーニー 『リダウト』プラス 8.16(火)–9.4(日) くじらびと 9.27(火)–10.14(金)
9	見るは触れる 日本の新進作家 vol.19 (企) 9.2(金)–12.11(日)			
10		野口里佳 不思議な力 (収) 10.7(金)–2023.1.22(日)	写真新世紀 30年の軌跡 10.16(日)–11.13(日)	
11				
12	国際写真賞 プリピクテジャパンアワード 12.17(土)–2023.1.22(日)		写真展 星野道夫 悠久の時を旅する 11.19(土)–2023.1.22(日)	
2023 1				
2	恵比寿映像祭 2023 2.3(金)–2.19(日)			
3	3F展示室のみ 2.3(金)–3.26(日)	深瀬昌久 (企) 3.3(金)–6.4(日)	APAアワード2023 2.25(土)–3.12(日) アンリ・カルティエ=ブレッソン 3.18(土)–5.14(日)	(収) 収蔵展 (企) 企画展

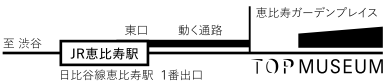
※12月以降に始まる展覧会名はすべて仮称

東京都写真美術館 年間パスポート「TOPMUSEUM PASSPORT 2022」販売中

展覧会を無料または割引でご鑑賞いただけるお得なパスポートです。上記スケジュール内の (収) は無料、(企) は4回まで無料、その他は割引料金となります。特典の詳細は、当館ホームページのご利用案内からご確認ください。

[販売価格] 3,300円(税込)　[販売期間] **2022年9月30日まで(予定)**
[有効期間] 購入日～2023年3月31日　[販売場所] 1階総合受付

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00–18:00(木・金は20:00まで)※入館は閉館30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始、臨時休館

東京都写真美術館ニュース「アイズ2022」110号 □発行日:2022年8月9日 □企画・編集:東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本:株式会社公栄社 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団

東京都写真美術館©2022 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。

※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。